

かたりべ148

豊島区立郷土資料館・芸術文化推進グループだより

令和5年度収蔵作品・資料展 展示案内

豊島区所蔵品展

- 「くらべてみる！ 5つの窓から
—池袋モンパルナスが旅をする2—」
- 「暮らす・祈り～富士へ行くなら両参り～」
- 「むかしの道具」

令和6年2月1日(木)～3月24日(日)

休館日：2/5, 11, 12, 13, 18, 19, 23, 26

3/4, 11, 17, 18, 20

開館時間：9時～16時30分

くらべてみる！5つの窓から

—新収蔵作品を中心に—

池袋モンパルナスが旅をする2

企画展示室

収蔵美術作品による展示は、二〇二二年一月の「生誕一二〇周年 小熊秀雄展」以来となります。テーマ展は初、今回は「作品をよく見てみる」ための展示を試みます。

具体的には、一点の作品を見ても、感情が動かずふーん、で終わるときもあれば、ここがこんなふうになっているんだ。ではあれは何を描いているんだろう、どうしてそのように描いたんだろう？と、

疑問がつきつきと湧き、画面を凝視し興味を掻き立てられる場合もあります。こうした疑問と対話は、くらべてみることで助けになることが多いです。一点の作品からでは思いが動かない時は、何かとくらべてみることをおすすめします。

何とくらべてもよいのです。同じところと違うところを考えてみるのが初めの一歩。その際に、何かが共通するもの同士をくらべると、より考えが展開することが多いようです。たとえば同じ作家の作品をくらべる。同じ色調の作品をくらべる。同じ大きさの作品をくらべる。同じ時期に作られた作品をくらべる。タイトルが同じものをくらべる。材料が同じものをくらべる。

本展は、そうしたくらべてみるという行為を、旅という大きなくくりの中で五つの小さなまとまり（これを窓と呼んでいます）から提案します。

なお、自分が作品に対して反応しなければそれでよい、と考えることが必要なことも、お伝えしておきたいと思えます。正解も強制ありません。

1..はじめの窓

ここではひとりの作家がある年とその翌年に描いた二点の作品からご覧いただきます。まずそれぞれを見て、次に一年しか制作年が違わないのに人のかたちやどう変わっているのかをご覧いただきませう。楽しそうな浜辺の様子（図版右）、《浜》（一九五五年）から、翌年には凧と顔とが一体化し、不穏な空気を感ぜられる作品（図版左）、《凧と女》（一九五六年）になっています。けれどそこには恐怖ではなく、おかしみも感じられないでしょうか。この作品を描いた高山



良策は、絵画制作をする一方でウルトラマンの怪獣造作を担ったことでも知られています。一九六〇年代ころから怪獣の着ぐるみを制作していた高山の経歴を知ると、制作の変化に怪獣造作が影響していたのでは？と、連想が働くでしょう。

今展ではまずこうした表現の変化を、作家の旅ととらえてみます。

旅には、場所の移動を伴うことが多くあり、導入部では移動を感じさせる作品も展示しています。一方で現実の空間を移動しなくても、頭の中で、あるいは夢の中で想像をめぐらせて大きな旅をすることもあります。そうした作品も導入部に展示しました。所蔵作品の中には仮想空間を扱ったものはないですが、そうした今の我々の暮らしとくらべてみることも一興(いちいき)でしょう。

2..旅の窓から ヨーロッパ、アジア／4..旅の窓から 北海道、沖縄

ヨーロッパに留学したり旅に出たり、西洋ではぐくまれてきた芸術に触れたいと考える作家はいつの時代にも多くいました。館慶一(たてけいいち)は一九七〇年代にパリに渡り、力強い多くのデッサンを残しています。コンテによる太い線を生かしたのもあれば、細い線で繊細に描かれたデッサンもあります。館が描いたフランスの

エトルタは寺田政明(てらた まさあき)によっても描かれています。作家が描きたくなる風景には何か特徴があるのででしょうか？

一九五五年にセーヌ河畔を描いた藤本東一良(とういちりょう)は、一九三〇・四〇年代には南洋に赴いていました。二〇年のときを隔て、なにごどう変わったのでしょうか。

一九三〇年代にはアジアを訪ねる作家も多く、海南島(かいなんとう)(ハワイと同緯度)、北陵(ほくれい)(北海道・函館と同緯度)、台湾(沖繩・石垣島と同緯度)と、広範囲にわたります。北海道や沖縄を描いたほかの作家たち(コーナー④)も、目の前に広がる風景を描き留めたいという動機によるもので、ヨーロッパやアジアを描く動機と変わらないでしょう。

3..心の旅

こころの中、頭の中で考え、何かを思い描くこと、それらも旅といえましょう。平澤熊一(ひらさわくまいいち)の描く花と鳥だけの世界は、画面が花と鳥で埋め尽くされています。桂川寛(かつかわひろ)は雲の上に都市を作り出します。手前の狐は作り出された都市を押(お)ゆしてあるのででしょうか。各章の立体作品は展示室の中央に集めています。建畠寛造(たてはたかかず)の《核と殻》(かくとから)は一九五九年の制作であることを考えると、中心としての核か、核物質の核なのか、それらを外側と内側が

嵌(は)め入(こ)りしあう構造として提示しています。当時彫塑(ていそ)に使うには新しい素材、ポリエステルが用いられていることにも注目してみましょう。導入部でも見ていただいた高山作品は、一九八一年の二点を加えると、さらに見る人それぞれの物語が紡がれてくるでしょう。

5..わが家の窓 さくらが丘バルテノン 最後に、ここ郷土資料館にほど近い豊島区長崎のさくらが丘バルテノンと呼ばれるアトリエ村に關係する作品を中心にご覧いただきます。ちよつと近所へ、さくらが丘まで旅に出てみましょう。

常設展示室のアトリエ村模型とも併せてご覧いただきます。模型内部を撮影した映像等もご覧ください。彼らが今この場所のとても近くに暮らしていたことがわかるでしょう。關係する写真も展示します。区内で制作していた島田由紀子(しまだ ゆきこ)の作品の変化も、見て取れることでしょう。見る人それぞれに幾通りもの見え方があり、それが見る人に委ねられていて、こう見なければいけないということはないのが、美術の基本的な見方、立場、醍醐味(だいごみ)です。その理由をそれぞれに持ちながら、アトリエにあつた特徴のある窓から外を見てみるように、あるいは屋外から窓を通して／開けて室内を見るよう

に、さまざまな体験をしていただきたい展示です。(美術 小林未央子)

コラム 窓について



ルネサンス期、アルベルティ著『絵画論』(一四三六年)の中で、四角い縁(ふち)は「窓」、遠近法のルールに則(したが)って描いた絵画は「開かれた窓」と見立てられてきました。それ以来、近現代美術の世界では絵画の持つ「窓」の性質は常に意識されてきました。「窓」の向こうは独立した特別な空間なのです。

本展で窓を開き旅に出る前に、一九四八年のさくらが丘バルテノンのアトリエ村を写した写真を見てみましょう。着物



アトリエ村外観(樽松正利氏提供)

の男性がアトリエ付貸家の北向きの窓から風景画と見られる絵画を出しています。アトリエ付貸家には絵画専用の出入口があったので窓から絵画を出すことは少なかつたようですが、この写真を見るとまさに絵がアトリエを飛び出して旅にでるようです。そしてこのフレームの中に入れて子構造となった「窓」について考えてみたくになります。アトリエ付貸家に集った芸術家たちから始まる池袋モンパルナス、その象徴とも言えるこの写真が、本展のテーマを支えています。

(美術 堀口麗)

富士へ行くなら

両参り

大ケース

江戸時代後期には、レクリエーションとして江戸市中や江戸近郊への社寺参詣がなされるとともに、江戸を離れて泊りがけで旅行することもありました。その行き先は聖なる山であり、信仰を基盤とした講と呼ばれる団体を結成しての登拝が行なわれました。

富士山もその行き先の一つです。富士山を望むことができる関東平野では富士信仰も盛んで、数多くの富士塚が造られています。

豊島区内にも、池袋富士（池袋本町三

丁目）と長崎富士（高松二丁目）の二つ

があります。池袋富士塚を造った池袋月

三十七夜元講さんじゅうしちやもとこうの活動が戦争を境に停止し

てしまったように、富士講は時代を経て

数を減らしていきますが、講の道具は区

民からの寄贈により当館に残されています。

本展ではそうした資料から、富士山

登拝の姿、区内での講活動、そして富士

山と大山への両参りを紹介します。

両参りというのは、関連のある二つの

山のうち一方の山だけに参る片参りを嫌

う風習で、○○山へ登拝に行くのであれ

ば必ず△△山へも立ち寄らなければなら

ないというものです。富士山であれば伊

勢原市の大山がセットでした。

区内の富士講の人々が富士山だけでな

く大山へも行ったことは、富士山登拝の

ときに着る行衣に捺された御朱印から知

ることが出来ます。

大山も、講による登拝が盛んに行なわ

れた山です。本展では、大山への登拝を

伝える資料として、江戸期に区内の講が

大山へ奉納し、その後持ち帰ったと考え

られる木製の太刀も展示する予定です。

当時の山に対する信仰や旅に対する情熱

をうかがい知ることが出来ます。

(郷土 鄧君龍)

むかしの道具

レファレンス

ルーム

毎年一月から二月頃にかけて、区内小

学校三年生からの団体見学が増える時期

です。小学校三年生は、施設見学や郷土

学習を目的に来られます。本展はこの時

期に合わせて身近な生活道具の変遷を紹

介するものです。

展示するのは、しわを伸ばす道具とご

飯を炊く道具です。しわを伸ばす道具は

現在では電気アイロンを使いますが、そ

れより前の時代には火のしやこてや炭火

アイロンがありました。ご飯を炊く道具

は、今では炊飯器を使いますが、以前は

羽釜などを使いました。

こうした展示の内容は、郷土学習とい

いながら実は全国的なもので、いずれも

小学校三年生が理科の授業でエネルギー

を学び始める時期にあることを意識して

います。

今回当館でもやはり同じような資料を

展示しますが、今後の郷土学習の導入と

なるように、二つの工夫をしました。

第一に、単に現在は見られなくなった

道具を並べて「昔は不便だった」「今と

は違う」というのではなく、いつの時代

もその当時の生活に合った道具を使って

いるということ伝えることです。

第二に、昔の道具が身近に感じられる

ように、現在までの変遷について触れる

ことです。郷土という昔のこととい

メージされますが、現在との関わりがな

ければ身近なものとして捉えるのは難し

いでしょう。そうして考えてみると、小

学生にとつては、電気アイロンや電気炊

飯器の登場は目新しいものではありません

ん。電化製品を使わない暮らしがあつた

ことや生活道具が電化していく過程も紹

介しながら、本展では電化した後のこと

にも触れました。

なお、団体見学は開館中に行なつてお

り、タイミングによって混雑することが

あります。小学校からの団体見学は、平

日午前中に来られることが多いようです。

ご不便をおかけしますがご理解のうえご

来館くださいますようお願いいたします。

(郷土 鄧君龍)



小学校団体見学の様子

セピア色の記憶

第38回 祝！椎名町駅!! 今年は開設百年なのです

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した昭和三四（一九五九）年と現在（二〇二三年一月二五日）の椎名町駅付近の様子です（上写真は松井一彦氏撮影）。地図に示した*印は撮影地点を、↓は撮影方向を示しています。

椎名町駅は、大正四（一九一五）年に開業した武蔵野鉄道（現西武池袋線）池袋駅の次の駅として大正一三年六月一日に開設されました。今年に開設一〇〇年という節目の年にあたります。



上の写真を見ると、昭和三四年当時の椎名町駅は、現在のような相対式ホームではなく、島式ホームを採用していること、また、最近都内ではあまり見かけなくなつた構内踏切が改札とホームの間にあつたことがわかります。豊島園駅から池袋駅へ向かう上り電車が停車中の椎名町駅の様子です。

駅周辺に目を向けると、高層の建造物は一切ないことがわかるほか、かつての郵便ポストや公衆電話スペースが確認で



きます。さらに駅舎の屋根形状に注目すると、下段に掲載した昭和五年頃の駅舎の屋根と同じことに気づきます。アジア太平洋戦争中の空襲被害により、区域の約七割が焼失した豊島区ですが、椎名町駅付近は焼失を免れたため、駅の開設当初から戦中・戦後を通して建て替えることなく、同一の駅舎を使用していたことになります。

江戸時代以降、現在の目白通りと山手通りが交差するあたりを中心に開けた



昭和5（1930）年頃の椎名町駅舎【『郊外画報』所収】

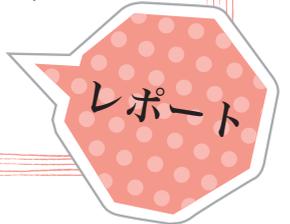
椎名町について、一九世紀前半に成立した紀行文『嘉陵紀行』には、慶徳屋という立派な穀物商がいること、この町の商家には貧しいものが見当たらないなど、裕福な町の印象が記されています。一〇〇年前の駅開設時に駅名を決める際も、こうした賑わいをみせる町場が近隣に所在するところから採用したと考えられます。その後、昭和一四年から三九年にかけては、豊島区の正式な町名として椎名町一〜八丁目（おおよそ現目白四・五丁目と南長崎一〜六丁目地域）が使用されましたが、昭和三九年以降の住居表示の実施に伴い、町名としての椎名町はなくなりました。

（郷土 秋山伸一）

「生誕100年 佐川美代太郎展」関連イベント報告 2023年11月18日(土)開催

特別対談 夏目房之介×宮本大人「大人まんが」の臨界点

—「汗血のシルクロード」「望郷の舞」「冒頓単于」の位置づけをめぐって—



川美代太郎の教え子の方々など、多くの方にお越しいただき、ほぼ初めての試みである佐川マンガについて、どのように語られるのだろうかという熱気に包まれていました。

対談は佐川の代表作である漢代の歴史が源流となっているマンガ作品を中心に話が進められ、漫画史における位置づけや、佐川マンガの特徴などをお話しいただきました。

二〇二三年十一月十八日、「生誕一〇〇年 佐川美代太郎展」の関連イベントとして、特別対談を開催しました。マンガ批評家の夏目房之介氏と、漫画史が専門の明治大学日本学部教授の宮本大人氏をお招きし、これまでほとんど語られてこなかった佐川美代太郎のマンガ作品についてご対談いただきました。

今回の対談で取り上げていただいた作品は、イベント副題となっている「汗血のシルクロード」「望郷の舞」「冒頓単于」に「砂漠の鬼龍子」を加えた四作品です。宮本氏によると、これらの作品に共通するのは、作品の舞台が中国の歴史における「漢」の時代であること、「漢から西域に従軍した主人公が帰還することなく人生を終える」二点であり、佐川本人の戦争体験が重ねられている可能性を指摘されました。

続いて、同時代のマンガとの比較や佐川自身が西域を舞台とした作品を発表するに至った経緯についての考察が展開され、佐川作品の表現方法へと話題が移りました。夏目氏ははじめて佐川作品を読んだ際「衝撃を受けた記憶はあるが、あまり覚えていない」と述べられました。

当時の主流なマンガのスタイルではなかったことがひとつの要因で、佐川のマンガ作品は当時流行していたマンガのもとなつた戦前・戦後の「絵物語」に非常によく似ているといえます。また、佐川の作風はジャンル分けが難しいものの、「大人まんが」に分類することが可能で、基本的に人物は全身像で描く点、キャラクターの描き分けがはっきりしない点、細い線をたくさん重ねて描く点などが「大人まんが」と佐川作品とに共通する特徴であると指摘されました。

このキャラクターの描き分けがはっきりされていない点と、「絵物語」の特徴でもある「ナレーションベースで展開される語り」が手塚治虫以降のストーリー漫画に慣れた読者にとっては、感情移入のしにくさ、読みにくさにつながっているといえます。実際、夏目氏も手塚マンガで育った世代として、キャラクターを通して読者に感情移入をさせる作品が主流となっていたため、そうでない作品を読む「リテラシー」を持つておらず、どうしても「古いもの」として認識してしまふと述べられました。

宮本氏は佐川作品の特異性について、海外漫画からの影響を指摘され、佐川作品の掲載誌に海外の漫画作品が多数掲載されていたことや、絵本のような造本デザインと類似する点などを挙げ、なんらかの影響を受けた可能性があるのではないかと言及されました。

佐川美代太郎に関しては、今後もっと探求されていくべき作家である、ということに対談は締めくくられ、来場者の質疑応答に移り、盛況のうちにイベントは終了しました。

夏目先生、宮本先生、そしてご来場いただきました皆様、誠にありがとうございました。(文学・マンガ 佐伯百々子)



駒込歴史散策

本郷丹後守下屋敷と木戸孝允別邸跡 — 前編



① 石碑・別邸跡周辺の地図（筆者作成）

今回は「駒込歴史散策」と題し、駒込駅からほど近い本郷丹後守（以下、本郷氏）下屋敷と木戸孝允別邸跡について前後編に分けて取り上げていきます（①）。

旗本本郷氏と御鹿狩



駒込パークハウス（豊島区駒込一丁目一〇一―一五）と呼ばれるマンションの一

角に二つの石碑があります（②）。

右側の「鹿碑」は寛政七（一七九五）年三月五日、十一代將軍徳川家斉の御鹿狩に同行した旗本本郷泰行が造立。左側の「瘞賜猪碑」は、嘉永二（一八四九）年三月一八日、十二代將軍家慶の御鹿狩に同行した本郷泰固（泰行の孫）が造立しました。御鹿狩は、下総国小金原（千葉県松戸市）周辺の田畑を荒らす害獣（鹿や猪など）の捕獲と軍事訓練を兼ねて行われ、最盛期には旗本や百姓、人足を合わせて約一〇万人が動員されました。また、石碑には捕らえた獲物を將軍から下賜されたとの記述もあり、鹿の皮を脚絆（狩装束）に仕立て、その亡骸を下屋敷内に埋葬したとあります。

泰固は安政四（一八五七）年に若年寄へ昇進し、一万石の大名として駿河国（静岡県）川成島藩を立藩します。しかし、翌五年の「安政の大獄」により泰固は改易され、川成島藩は廃藩しました。旗本が自らの事跡を書き残した石碑は数が少なく、武家の足跡や地域の歴史を知るうえで貴重な歴史資料といえます。

両石碑は、平成一〇（一九九八）年一月一三日に豊島区指定有形文化財（歴史資料）に指定されました。



② 本郷氏屋敷跡から移設された石碑（筆者撮影）

本郷氏の屋敷と老狐



『安政年代駒込富士神社周辺之図及図説』（一九三五年作成、文京区指定文化財）より、本郷氏の屋敷に住み着いていた尻尾の先が白い老狐についてご紹介します。

その狐はとてもおとなしく、殿様（本郷氏か？）から扶持を与えられ、仲間（武家奉公人）のお爺さんが毎日餌をあげていました。稀に屋敷の外に狐が姿を現した際には、人々が呼びかけ合い、危害を加えることなく狐を眺めていたそうです。

御鹿狩で下賜された鹿の亡骸を埋葬し、屋敷内の狐に扶持を与えるなど、慈しみともとれる行動から本郷氏と動物との関わりを見ることができました。

次回後編では、本郷氏の屋敷跡に建てられた木戸孝允の別邸についてご紹介したいと思います。

（郷土 清水健太）

【参考】松戸市誌編さん委員会『松戸市史中巻 近世編』松戸市役所、一九七八年。日本歴史学会『明治維新人名辞典』吉川弘文館、一九八一年。豊島区立郷土資料館編『豊島区地域地図 第三集 近世（江戸切絵図）編』（豊島区教育委員会、一九九〇年）所収「染井・王子・巣鴨辺絵図」（尾張屋板）嘉永七（一八五四）年新刻。

かたりべ
No.148



2024年2月16日
・豊島区立郷土資料館
・東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階
・電話 03-3980-2351

